

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 24日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530742

研究課題名（和文） 青年期高機能広汎性発達障害者の自己形成をめぐる葛藤に関する発達臨床的研究

研究課題名（英文） Developmental Clinical Research for Conflicts of Self-Formation with High Functioning Pervasive Developmental Disorder at Adolescence

研究代表者

木谷 秀勝 (KIYA HIDEKATSU)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：50225083

研究成果の概要（和文）：高機能広汎性発達障害（以下、HFPDD）の自己形成をめぐる葛藤について、支援をしている HFPDD を対象に 8 年目の追跡調査を実施した。その結果、自己形成の葛藤に関わる 2 つの要因が示唆できた。第一に、学童期から学習面と対人スキルの両面へのバランスある支援の構築が、自己肯定感の低下からくる葛藤への予防に効果的である。第二に、HFPDD の受け身型と不器用さが強い場合にコミュニケーション上の葛藤も強化されやすいので、自分の苦手さへの理解と対処スキルの獲得が重要になる。

研究成果の概要（英文）：This study is 8-Years following research of conflicts for self-formation with High Functioning Pervasive Developmental Disorder (HFPDD) who are supported by author. In result, two factors of those conflicts are suggested. First, construction of stable supports both study and interpersonal skills from primary school give protection of conflicts with decline of self-efficacy. Secondly, HFPDD with passive type and outstanding clumsy are reinforced to conflicts of communication, so self-understanding and training of coping skills for weak points are important.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：高機能広汎性発達障害、アスペルガー症候群、高機能自閉症、WISC-III、WAIS-III

1. 研究開始当初の背景

高機能広汎性発達障害（High Functioning

Pervasive Developmental Disorders : HFPDD) への理解と対応に関する研究は生物

学的研究を中心として急速な展開を迎えていた。同時に、HFPDD 本人の手記からわかる「体験世界」から、HFPDD 自身が抱える知覚・認知の感覚世界は独特な様相を呈していることは明白になってきた。

しかも、こうした体験世界における他者との違いに気づくようになる青年期では、気づくことによる強い衝撃とともに、今後も同じような苦痛が続くことに気づくことで、新たな不安や抑うつ状態が生じやすくなる。

こうした青年期 HFPDD の自己をめぐる葛藤に対する適切な支援体制はまだ十分に構築されていない現状であった。したがって、青年期 HFPDD の自己形成をめぐる葛藤の特徴とそれに適した対応を検討することは、特別支援教育の発展とも関連して重要な視点であった。

2. 研究の目的

こうした青年期以降の自己形成をめぐる葛藤状態は、中学生以降から支援を始めた HFPDD に多く生じやすいことは事実である。その理由として、小学校での周囲の無理解からくるさまざまな混乱や外傷体験（特にいじめや不登校）の問題、また、家族が HFPDD に関して正しい理解を得ていないために生じる問題が青年期以降の混乱の背景にあることは十分に考えられる。

そこで、今回の3年間の調査研究では、大きく2つの目的を明確にしたい。

第一に、これまで継続的に調査してきた HFPDD 児が思春期・青年期に達している。そこで、さらに継続的な支援と調査（計8年間）を行い、HFPDD 児に見られる青年期の自己形成をめぐる葛藤の特徴を明確にしたい。

第二に、小学校から支援を始めた現在思春期から青年期の発達段階を迎えている HFPDD 児の自己形成をめぐる葛藤の特徴と、中学校以降に支援を始めて、成人期を迎えた HFPDD

児者（青年期群）との比較検討を行い、早期からの特別支援教育や家族理解が果たす効果について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

平成22・24年度では、平成20年度に調査した HFPDD 児者及びそれ以前に調査して、思春期・青年期から支援を開始した HFPDD 児者の計20名の追跡調査を実施して、青年期 HFPDD に特有な自己形成をめぐる葛藤について明確にする。

平成23年度では、平成21年度に調査した HFPDD 児者及びそれ以前に調査して、児童期から支援を介していた HFPDD 児で青年期（15才以上）に達した計30名の追跡調査を実施して、HFPDD 児に特有な自己形成をめぐる葛藤を明確にしたうえで、思春期・青年期から支援を始めた HFPDD 児との比較検討を実施する。

具体的な調査内容としては、これまで継続的に実施してきた WISC-III（あるいは WAIS-III）知能検査、臨床描画法（○△□物語法と人物画）、絵画統覚法（TAT）、及び自己意識に関する半構造化面接を実施する。さらに、今回の調査研究では、家族からみた HFPDD 当事者の苦悩についてインタビュー調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 平成22年度の成果

① 目的・方法

今回の調査研究では、継続的に調査している青年期 HFPDD（継続群）が7名（女性2名）、新たに青年期以降に支援を初めた HFPDD（新規群）が6名（女性2名）を対象に調査を実施した（計13名）。

② 結果・考察

継続群では、以前の平成18・20年度の調査結果と比較して、WAIS-IIIでは、言語性・動作性・全検査IQがすべて高くなる特徴が

見られた。特に、言語性項目では、「単語」と「理解」が高く、それに続いて「算数」と「数唱」も高い傾向が見られた。動作性項目では、「行列類推」と「符号」が高くなる特徴が強い。

一方新規群では、言語性項目では、「類似」と「単語」が高く、「算数」と「数唱」が低い特徴があり、動作性項目では、「完成」と「符号」が低く、「積木」と「行列」が少し高くなる傾向が見られる。以上の特徴から、継続群では、全体として状況判断や課題への迅速さと言語表現の伸びが安定感に関係しており、一方新規群では、初期緊張、抑うつ傾向、強迫性のリスクが潜在的に高い状態であることが示唆される。

また、他の検査では特徴的な差異が見られないことから判断しても、青年期 HFPDD の場合、柔軟性は有しても、基本的な状態像に大きな変化は見られない。しかしながら、学業もしくは就労等において志向性ある日常生活と周囲からの適切な支援体制の有無が、青年期 HFPDD の安定感を維持・促進させる重要な要因の一つであることが考察される。

(2) 平成 23 年度の成果

① 目的・方法

HFPDD 児 23 名の継続調査を実施した。そのうち、平成 16 年度から継続調査した HFPDD 児 16 名（女性 2 名）、平成 18 年度から継続的に調査した HFPDD 児 7 名（女性 3 名）であった。調査内容は、WISC-III（あるいは WAIS-III）知能検査、臨床描画法（○△□物語法か樹木画テスト）、絵画統覚法（CAT か TAT）、及び自己意識に関する面接を個別に実施した。

② 結果・考察（主に WISC-III の分析を通して）

主に 8 年間追跡調査した HFPDD 児では、小学生から中学生では、WISC-III の「単語」と「理解」のバランスが安定すること、また「積

木模様」と「組合せ」の高さから、「困った」時に一人で対応できる能力の形成とその基盤に「達成感」から生まれる「自己肯定感」の維持が安定することが示唆された。また、中学生から高校では、「算数」と「数唱」の同時処理系が安定すること、「行列推理」と「積木模様」と「符号」とのバランスが安定して、複雑な状況や課題への迅速さと切り替えが可能になり、環境の変化に対応して、新たな自己の形成が進みやすくなることが示唆された。

さらに、児童期から継続的に支援している「児童期群」と、思春期以降に支援を始めた「思春期・青年期群」での同時期の WAIS-III を比較すると次の 3 点に差異があることが示唆される。第一に、「児童期群」が「思春期・青年期群」と比較して、言葉への過敏さは低下するが、自己表現の柔軟さは伸びる。第二に、「児童期群」に不器用さによる書字障害が減少するので、学習面で生じやすい自信の低下が予防できる。第三に、「児童期群」の「数唱」、「配列」、「理解」に項目間での低下が見られる。この事実から、家族や学校の支援により、周囲と合わせるための葛藤が減少して、「自分らしく」学校生活を過ごしている可能性も推測された。

以上の結果から、早期からの家族や学校の支援を通して、安定した自己形成が進む可能性が高いことが明確になった。

(3) 平成 24 年度の成果

① 目的

思春期・青年期から支援を開始した HFPDD 者が抱える自己形成をめぐる葛藤の特徴を明確にすることを目的とする。

② 方法

対象者：平成 18・20 年度から継続的に支援している HFPDD 者 9 名（女性は 1 名）に調査を実施した。そのうち、定期就労は 4 名、

就労移行や研修中が3名、無職が2名となっている。精神障害者保健福祉手帳の取得が5名。方法：WAIS-Ⅲ知能検査、臨床描画法（○△□物語法、バウムテスト）、TAT、自己意識に関する半構造化面接を個別に実施した。

③結果・考察

WAIS-Ⅲでは、平成18年度のWAIS-Ⅲと比較すると、言語性・動作性・全検査IQのそれぞれに大きな低下は見られない。また、言語性では「類似」、「理解」、動作性では「絵画配列」、「絵画完成」、「符号」が伸びている。臨床描画法では、特にバウムテストからは社会適応の良好さが見られるが、不器用さが強い場合には、樹冠部の処理のバランスが顕著で、対人関係への過敏さも示唆される。TATでは、大きな変化は見られない。自己形成をめぐる葛藤に関しては、就労状況が大きく影響しており、就労や就職活動がうまく行かない場合に、過去から現在の自己への否定的な面や環境に対する迫害的な感情が強く出てきている。

以上の結果からは、次の2点が示唆される。第一に、継続的な支援により、社会的適応状態は安定してくるが、その一方で他者や社会からの評価への過敏さが強くなるリスクが高まる。したがって、就労してからの給与や評価などの視覚的な達成感を実感できる支援システムが必要になる。第二に、ワーキングメモリーに関わる能力が伸びない点から判断して、就労を含めて、脳機能の「中央実行系」の不全状態をサポートできる適切な社会的モデルの存在が、児童期や思春期以上に青年期以降で重要になる。

(4)8年間の自己形成の発達的变化に関わる要因

①目的

今回の研究の第一の目的に関しては、22年

度から24年度までの成果を通して検討することができた。

次に第二の目的に関する考察を検討したい。具体的には、平成23年度に実施した児童期から継続的に支援しているHFPDD児の高等教育の段階で実施したWAIS-Ⅲの結果と平成18年度に実施した青年期HFPDD者（一回目のWAIS-Ⅲの結果）との比較（目的①）である。具体的には、自己理解が進み、将来への自己展望が広がる16歳～22歳時点の結果を比較することを通して、自己理解が進む要因の分析を検討する。第二に、平成24年度の調査で実施した青年期で支援を開始したHFPDD者（青年継続群）の4回目と過去3回のWAIS-Ⅲの発達的变化の比較（目的②）である。具体的には、青年期での適応状態と関連させながら、社会的な適応を維持する要因について分析を検討する。

②分析方法

1) 対象者

平成18年度より現時点までの追跡調査に協力したHFPDD者のうち、児童期群9名（17～21歳、女性2名）、青年期群12名（16～22歳、女性3名）、青年継続群7名（女性1名）を対象とする。

2) 分析方法

WAIS-Ⅲ（11項目実施法）の言語性・動作性・全検査IQと言語性6項目・動作性5項目それぞれの比較（t検定）を行う。

③結果

それぞれのIQの比較では、児童期群が青年期群よりも言語性・全検査IQに高い傾向が見られた。また、青年継続群が青年期群よりも全検査IQで高い傾向が見られた。言語性項目では、「類似」は青年継続群が児童期・青年期群より高い傾向があり、「知識」は児童期群が青年期・青年継続群より有意に高かった。「理解」は青年継続・児童期群が青年

期群より有意に高かった。「数唱」は児童期群が青年継続群より高い傾向があった。動作性項目では、「配列」は青年継続群が児童期・青年期群よりも優位に高かった。「符号」は児童期・青年継続群が青年期群より有意に高かった。

④考察

以上の結果から、児童期からの継続的支援の場合、学校適応として学習行動（「知識」を通しての基礎学力の維持、状況判断としての「理解」、「符号」を通しての情報整理）がコミュニケーションと自己肯定感の維持に大きく関与することが示唆される。一方で、青年期からの継続的支援の場合、社会適応に必要な能動的コミュニケーション（困った事態に対する適切な対処スキルとしての「類似」、「理解」、「配列」）能力の伸長が重要であるが、就労や就労維持に必要なワーキングメモリー系の課題遂行能力に課題を残すことが示唆される。

⑤総合考察

以上のように8年間での発達的变化を総合的に検討することから、青年期HFPDDの自己形成の葛藤に関わる重要な2点が示唆できる。第一に、学童期からの継続的な支援において、学習面（特に、得意教科を伸ばすスキル）と対人スキルの両面へのバランスある支援プログラムを構築することにより、思春期以降のリスクが高くなる自己肯定感の低下から派生する葛藤状態への予防的支援が効果的になる。

第二に、ワーキングメモリーに関する複雑な課題処理への苦手からわかるように、HFPDDのタイプでも、受け身型と不器用さが強いタイプの場合には、コミュニケーション上の葛藤も強化されやすく、結果的に抑うつリスクも高くなることが予想される。したがって、青年期の早い段階から、自己理解を

中心にした支援プログラムを積極的に取り入れることが重要である。特に、自分の苦しさへの理解と適切な対処スキルの獲得が重要になる。

こうした特徴が、さらに10年目の経過を調査することで、問題点を明確にすることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① 木谷秀勝、田中亜矢巳、高機能自閉症スペクトラム障害児の自己形成をめぐる発達的变化-小学校から8年間の継続調査（主にWISC-III）の分析、山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要、査読無、印刷中
- ② 木谷秀勝、子どもの発達と知的評価-第三の告知をめぐる、アスペハート、査読無、33、2013、110-117
- ③ 木谷秀勝、子どもの発達と知的評価-第二の告知をめぐる、アスペハート、査読無、32、2012、90-97
- ④ 木谷秀勝、子どもの発達と知的評価-第一の告知をめぐる、アスペハート、査読無、31、2012、96-103
- ⑤ 木谷秀勝、知能検査がもつ可能性と限界～WISC-IV事始め、アスペハート、査読無、30、2012、94-100
- ⑥ 木谷秀勝、知能検査がもつ可能性と限界～WISC-IIIの実践を通して：その2、アスペハート、査読無、29、2011、90-96
- ⑦ 木谷秀勝、知能検査がもつ可能性と限界～WISC-IIIの実践を通して：その1、アスペハート、査読無、28、2011、90-95
- ⑧ 木谷秀勝、子どもの発達と知的評価-5年間の追跡調査の結果から見えてくる支援の方向性、アスペハート、査読無、9(3)、2011、58-64
- ⑨ 木谷秀勝、子どもの発達と知的評価-5年間の追跡調査の結果から（青年期編）、アスペハート、査読無、9(2)、2010、74-79

〔学会発表〕（計6件）

- ① 木谷秀勝、川口智美、原菜つみ、豊丹生啓子、中庭洋一、高機能広汎性発達障害児の自己の形成をめぐる発達的变化-小学校から8年間の継続調査（主にWISC-III）の分析、第53回日本児童青年精神医学会総会、2012年11月2日、砂防会館（東京都）
- ② 豊丹生啓子、原菜つみ、木谷秀勝、中庭

洋一、発達障害学生の大学生生活の適応に関する一考察-受け身的適応群に注目して、第 53 回日本児童青年精神医学会総会、2012 年 11 月 1 日、砂防会館（東京都）

- ③ 木谷秀勝、自閉症スペクトラム障害の「心の世界」への理解と対応（教育講演）、九州・山口地区自閉症研究協議会第 36 回、2012 年 2 月 5 日、鹿児島大学（鹿児島市）
- ④ 木谷秀勝、川口智美、原菜つみ、豊丹生啓子、中庭洋一、高機能広汎性発達障害学生に対する就労を視野に入れた支援の試み、第 52 回日本児童青年精神医学会総会、2011 年 11 月 11 日、あわ銀ホール（徳島市）
- ⑤ 豊丹生啓子、原菜つみ、木谷秀勝、中庭洋一、発達障害学生の大学生生活の適応に関する一考察-WAIS-R 及び WAIS-III の分析から、第 52 回日本児童青年精神医学会総会、2011 年 11 月 11 日、あわ銀ホール（徳島市）
- ⑥ 木谷秀勝、川口智美、松山愛、坂本佳代子、中庭洋一、高機能広汎性発達障害児の成長に伴う学校適応への理解と対応 - 継続的に実施した WISC-3 (WAIS-III) の変化からの考察、第 51 回日本児童青年精神医学会総会、2010 年 10 月 30 日、ベイス文化ホール（前橋市）

〔図書〕（計 3 件）

- ① 木谷秀勝、高機能 ASD の心理アセスメントと支援、金子書房、印刷中
- ② 福田廣、名島潤慈監修、心理学へのいざない、北大路書房、2012、185
- ③ 辻井正次編、金子書房、特別支援教育実践のコツ、2011、187

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木谷 秀勝 (KIYA HIDEKATSU)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：50225083

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：